

---

# サウンドのないサウンドノベル “ 殺人を前提としたお付き合い ” 第一幕

イボヤギ

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

サウンドのないサウンドノベル “殺人を前提としたお付き合い” 第一幕  
い” 第一幕

### 【Nコード】

N1591F

### 【作者名】

イボヤギ

### 【あらすじ】

読まれるあなた自身の選択によって、ストーリーが変化してゆくという、お馬鹿な試みのサウンドノベル風な代物です。（もちろん、音は出ません）完全犯罪に一步近づくのもよし、失敗するのもよし、はたまた、未遂で終わるのもよし……とにかく、気軽にチャレンジして下さいませ。賛否両論 いえ、反論ばかりではございませうが、何しろ“あっちゃこっちゃ”に飛び回ります。従いまして、気の長い方にはそれなりに、短気の方にはしち面倒臭く、このよう

サウンドのないサウンドノベル “殺人を前提としたお付き合い” 第一幕

に感じられるやもしれません。byイボヤギ\*new / 最後まで  
到達されました266名の方、甚だお手間を取らせました事をここ  
に深くお詫び申し上げます。(6/6)

ふりだし（前書き）

イボヤギです。各章の末尾に“選択肢”がございますので、「これっ！」と思われまます番号の章に飛んでくださいませ。（リンクが貼れないので、その都度TOPに戻る必要がございます。あしからず）なお、“選択肢”がなく、そこで“了”とストーリーが終了する章もございます。お馬鹿な試みなので、どうぞ寛大なお心を持ち、チャレンジしてってください。また、様々なご意見を賜りたく思いますので、賛否にかかわらず宜しくお願い申し上げます。では。

ふりだし

「ねえ、光つたらさ、何故リンゴが嫌いななの？」

それなりに有名な話らしく、たまに友人に聞かれる事がある。自分で考えても、その理由は定かではない。まあ強いて言うならば、あのクエン酸カリンゴ酸かがもたらす酸っぱさだろうか？ だが、決まってこう答える事になっている。

「好きや嫌いには、いちいち理由なんてないと思うよ」

今も、一つ嫌いなものが生まれている。だが、今までとは違って、その理由ははつきりしていた。“憎い” 2×9×5=90  
まさに、“苦渋”だ。この荒牧省吾だけは、断じて許す気持ちなど持ち合わせてはいない。間違いなく、ここまで他人を拒否したのは初めてだ。

それは、三日前の夜だった

「じゃあね、亜佐美。明日空いてる時にでも、また電話頂戴。その時に時間を決めようよ！」

高校時代からの無二の親友である、志垣亜佐美とはこのところ会ってはいない。メールも、以前は毎日やり取りしていたのだが、徐々に頻度も少なくなり、今では月に数回程度のものである。しかし、そんな些細な事などは関係なく、親友には間違いはなかった。疎遠になっている原因は、付き合っている男にあった。相当な嫉妬深い輩と聞いている。このような、古くからの友人の私にでも、平気に嫉妬してくるといふのだから、相当に性質が悪い。亜佐美からも、メールの度にその不満が漏れており、彼女なりに、かなり悩んでいる風にも見て取れた。私に出来る事は多くはないが、まずは久しぶりに会おうと、今しがた電話したのである。

話す事など、特に考えてはいない。相手の顔を見ながら、誠心誠

意、考えを述べるつもりだ

携帯電話の着信音で目が覚めた。もちろん、誰からの電話なのかは即座にわかる。それにしても……

(いくら、空いてる時間と言っても まだ、六時半？ 早すぎるよなあ)

「もしもし」

聞こえてきたその声に驚かされる。知っている声とかではなく男のものだった。

「もしもし、笠間光さんの携帯電話でしょうか？」

「え、ええ、そうですが……おたくは？」

「朝早くから申し訳ありません。志垣の弟です……」

何か言葉を挟もうとも、それができない。頭もまだ回っていない。姉の亜佐美が、今朝亡くなりました」

「う、嘘！」その先の言葉が出てこない。相手も待っていてくれる。ようやく

「どうして……何故？」

冗談です これを期待したが

「自分の部屋で倒れていました。それを発見して、父がすぐに救急車を呼んだのですが、すでに……」努めて冷静ではあるが、相手の声も詰まっている。

「すでに、姉は息を引き取っております。そこで、親友の笠間さんに、こうやってまず最初にお電話を差し上げたのです。あと、水戸さんにも電話しています。どうか、お二人で手分けして、知人の方々にこの旨をご連絡してくださいませんか？」

「え、ええ。わかりました」

恐らく、このように返事をしたような気がする。

電話を終え、呆然とする。“何故？”の答えを聞かされていない事に気づくわけもない。

どれぐらい経ったであろうか、ともかく我に返った私は友人らに

連絡しまくった。

三十分ほど、友人たちに連絡し、水戸雅恵ともやり取りをして、亜佐美の家までは車で向かった。

運転しながら、冷静さを取り戻してくるうちに無性に腹が立ってきている。連絡した友人の中に、『そんなのは苦手だから』とか『そんなに親しくなかったから』とか御託をならべて、友の死に駆けつけるのを拒否した連中がいたからである。人間を見た思いで一杯だ。

(これじゃ亜佐美も浮かばれないよね)

陳腐な言葉だが、まさしくそう感じた。

家が遠くない事もあって、一番乗りだった。見るからに消沈している既知の母親が、座敷へと案内してくれる。そして、目の前の布団の中に

「亜佐美？」思わず、顔に掛かっている白い布を捲ってみる。

「亜佐美……どうしちゃったんだよ？」

『えへへ、嘘でした！』今にも、聞こえてきそうな気がする。

「今日会って約束したじゃん！」目の前の彼女の顔が滲んでくる。

「もう、何で！」その細い腕をつかむ。が、異常に冷たい。まさしく、

夕べ確かに咲いていた花が、今は目の前で枯れている……

目の前にお茶が出され

「光ちゃん、有難う、ね」

そう言う母親は、無理に笑顔を繕っているのが悲しい。

「い、いえ」

「それにしても、立派になって……おばさん、驚いたわ……」やはり限度がある。

「なのに、ど、どうして、亜佐美だけが……」

泣き出す母親に

「お、おばさん。元気を出してください。亜佐美に笑われますよ」  
これしか言えなかった。何故死んだのかなどと聞けるはずもない。  
相手が乱れれば乱れるほど、不思議と自分が冷静になってくる。  
その時、チャイムが来訪者を告げた。ここが潮時と感じ、私は腰  
を上げた。  
「おばさん、元気を出してくださいね。ところで、是非とも葬儀に  
参列したいんですが」

新たに訪れてきた顔見知りの客たちと軽く挨拶を交わして、私は  
車へと向かった。

その時、後ろから

「笠間さん。今日は有難うございました」

振り向くと、声から、恐らく今朝の電話の主と思われる青年が立  
っている。

「弟の志垣健二です。姉がいつもお世話になっていたようで」

「い、いいえ、こちらこそ、亜佐美には世話になりっぱなしでした。  
あれっ、過去形だなんて……」再び、緩くないはずの涙腺が緩ん  
でくる。

「こ、これはどうも」青年は頭を下げながら

「しかし、笠間さんにだけは本当の事をお伝えする必要があると思  
いましたので」

「ほ、本当の事、ですか？」

「ええ、対外的には言えませんが、彼は、目の前まで近づいて  
き、小声で

「実は……姉は、自ら命を絶ってしまったのです」

「自らって？」

その可能性もありそうな気もしていたが、やはり実際に耳にする  
と驚いてしまう。

「ええ。ここに遺書もあります。他には見せられません」

そう言って、相手は胸の内ポケットから封筒を一つ取り出し、こ

ちらに渡してきた。

「そこには、笠間さんの名前も記されています」

果たして、二・三行ではあったが、私にも触れられていた。『ゴメンね』とか『許してね』とかの文句だったが、十分すぎるほど心に響いてくる。と同時に、別の新たな感情も芽生えてきた。

「どうやら、ここに数回載っている“省吾”なる男が原因のようですね？」

「笠間さんもそう思われますか。実は、その荒牧省吾という男に、姉は相当振り回されていました。異常なくらい嫉妬深いとか」

「それは知っています」

「他にも、自分のそれは棚に上げて、他に多くの女性とも付き合っていたとか」

「そ、それって酷い話ですね！」

「でしょう？ 姉もかなり我慢していたとは思いますが、さすがに最後の方には、頻繁に愚痴が漏れ聞こえていました」

外見は穏やかさを繕ってはいるが、そこはやはり若者だ。その表情には怒りが徐々に現れてきている。少しの間迷った挙句、こう言葉を重ねてきた。

「それに、よく顔にアザを作って帰ってきていました」

「ド、ドメスティック・バイオレンス……ですか？」

「ええ、間違いないと思います。でも、本人に何を聞いても一言も言わなかったものですから」

「警察には？ 法律も定められているから、彼らも動いてくれたはずですよ」

「“DV防止法”の事ですね。でも、あれはあくまでも配偶者間限定です」

「だけど、人を傷つけるんですから、何らかの罪になるはずでしょう？」

「ええ、暴行罪とか傷害罪にはなりますが。何しろ、当の本人が全

てを否定しましたので」

「亜佐美自身が、相手をそこまでかばったんですか……」

その心理状態が、経験不足のせいか今一つ理解できない。

「おーい、健二。こっちに来てくれ」

家の中から声が掛かった彼は、早々に立ち去ろうとした。

「すみませんでした、尾を引いちやうような話をしまして。どうしても、事実を伝えなかったので」

「い、いえ。こちらこそ言いにくい事をお話いただいて。では、失礼します」

とは言ったものの、“尾を引く”どころか“導火線”にでも化けてしまいそうな内容だった。

- 1、 葬儀には参列しない
- 2、 葬儀に参列する

あれから家に帰って、いろいろと迷ってしまった。明日の葬儀で、この内情を誰かに言いそうな気もするし、万が一にでも荒牧なる男が現れた際には、我を忘れ食ってかかりそうな気もする。そうなる、ご家族や知人やら、いや亜佐美自身に迷惑をかけるのは明らかだ。

そして出した結論は 明日は欠席というものだった。親御さんや健二君を始め、周囲からは“冷たいヤツ”と罵られるに決まっているが、きつと亜佐美だけにはこの気持ち伝わってくれる事だろう こう、自負している。

もちろん、一年後、五年後、十年後の今日……いや、この私が生き続けてゆく限り、これらの日には、必ずお墓の前で手を合わせる事を心に決めている。了

1 (後書き)

懸命なるご判断です。友を、人知れずいつまでも偲ぶ……素敵な光景が目には浮かびます。byイボヤギ\*なお、後半部のは、600字以内の投稿が不可なので、文字数稼ぎの為に付け足したものです。

家に帰って、あれこれ聞いてくる母には閉口した。ある程度はしゃべれても、肝心な話なんて言えるはずもない。とにかく、食事していても入浴していても、健二君の言葉が耳に貼りついたままだ。黒一色の身なりを準備した私は、亜佐美との想い出を胸に、早々にベッドに潜る事にした。

翌日、葬儀の会場には、失礼だがわざと少々遅れて到着した。受付には、水戸雅恵他、顔見知りの数人がいる。その誰もが、指輪の跡が白い。

「久しぶりじゃない、光」

「そつちこそ」

当然、場所が違っていたならば、もつと会話も盛り上がり、さながら同窓会にでもなるところである。が、ここは斎場だ。ましてや、この手には数珠やふくさも持っている。

雅恵に無理を言って、亜佐美の友人・会社関係・その他、この三つの帳面に目を通す。やはり、お目当ての人物は来てはいない。

小一時間で式も終了し、耳に葬儀社側のマイクの声が入ってくる。それに従って、当初の予定通り、私も用意されているマイクロバスに乗り込む。ざつと見渡すも、知り合いの顔は見当たらない。やはり、冷たいものだ。

やがて、締め切っているにもかかわらず独特の匂いが鼻についてき、目的地が近い事を教えてくれた。

最も哀しい瞬間は終わった。ごく最近まで元気だった生身の身体が、今こうやって数本のものに変わるのには、本当に忍びない。他人の私でもその様な気持ちになるのだから、今まで育てた両親の気持

ちなんて 到底、計り知れない。

思いを断ち切るように外に逃げた私だが、照りつけてくる太陽も、涙を乾かすまでは至らないようだ。

「今日は、最後まで有難うございました」

見上げていた顔を声がした方に向けると、そこには健二君がいる。今見ると、三つぐらい下 二十歳そこそこだろうか。

「いいえ、健二君の方こそ、お疲れが出ませんよう」

「あ、有難うございます」

恐らく、本来のものとはかけ離れた笑顔で彼は答える。

「やはり、来なかつたみたいですね？」

「え？ 笠間さんもチェックされたんですね？ ええ、やはりあいつは来ませんでしたよ。来たら来たで、少しは許してやろうかとも思っただんですが」

今の一言は気になったので

「許す……ですか？」

「ええ。もはや、許す気なんて、これっぽちも残ってはいません」

ここで、彼はこちらの表情を覗くように

「笠間さん。あなたはどう思われます？」

「どうって言われても」私は、今の思いをそのまま口にした。

「そうですね、“喜怒哀楽”を遡って来ているような気がします。

明日久しぶりに会えるという“楽”から、“哀”になり、今では気持ちいが“怒”と変わってきています」

相手は、今発せられた言葉を噛み締めている様子だ。そして、やがて

「では、“喜”まで戻られる気持ちなどはありますか？」

「“喜”まで戻る？」

「その言葉の通りですよ。復讐して、喜びを味わうのです」

復讐 正直言って、そこまで考える余裕はなかった。

「その復讐って？ 様々な復讐が考えられるのですが」

とは言うものの、最悪のケースも私なりに頭には描いている。

「復讐とは……始末する事です」

「殺すつもりなんですか？ 荒牧という男を？」

まさか己の口からこの言葉が出ようとは、予想さえしていなかった。

「そうです。殺すんです。それぐらいの報いは然るべきもの。そう思いますか？」話す度に表情が変わってくる相手は、さらにこちらに向かって

「無理にとは申しませんが、成功させるには、是非とも笠間さんにも協力して欲しいのです。如何なものでしょう？」

- 3、 一旦保留にする
- 4、 即座に了解する

家に戻った私は、一人考えあぐねている。もちろん、誰にも相談なんてできるはずもない。

(復讐……殺す……)

あれほど、“断じて許す気持ちなど持ち合わせてはいない”と思っ  
ていたくせに、こうやって久しぶりに悩んでいるのが、何とも気  
恥ずかしい。だが、ややもすれば、自分の人生がそこで終わってし  
まうのだから仕方がない。

(そこまで、あの荒牧という男が憎いのだろうか?)

会った事さえもない男である。この考えは、こつも繋がってくる。

(そこまで、私は亜佐美の事を思っているのだろうか?)

やがて、出した結論は

(そんな事したら、亜佐美も悲しむだろう)

要は、亜佐美の気持ちをダシにして、自分を正当化しているに他  
ならぬものだった。

(所詮、私も冷たいヤツなんだな)

そう自嘲しながら、先程聞いた番号に電話をする事にした。了

サウンドのないサウンドノベル “殺人を前提としたお付き合い” 第一幕

3 (後書き)

良識ある御仁と思われませう。これからの人生、是非ともこのままの  
姿勢にて、どうぞ頑張り続けて下さいませ。b y i ボヤギ

「協力ですか？」

空恐ろしい提案だが、あの、とても良い子だった亜佐美を追い詰めた男なんて、どう考えても許す気は起こらない。いや、それ以上に救えなかった自分に憤りを感じる。

（あと一日早く会っていたら）

「わかりました。是非、協力させてください」

「ほ、本当ですか？ いやあ、有難うございます」

これが、本来の彼の笑顔だろう。眩しさが際立っている。喜んでいる彼は、早速、何かをポケットから出してきている。

「実は、これが荒牧省吾本人です」

「用意周到なんですね」

そこには、亜佐美とのツーショットの写真があった。二人の笑顔で満ち溢れたものだが、その裏までは見えてはこない。

「こうやって姉と比較すると、恐らく百七十センチそこそこですね。だから、体力的にも問題はない。あとは、いつ、どこで、どうやって実行するかですね？」

「何だが、“5W1H”つばいですね」

「いえいえ。Whyは復讐のため、Whatは殺人を、Whoは私自身の手で。すでに、ここまでは決まっていますので」

恐ろしい言葉が次々と登場しているが、こちらにも閃いた事がある。

「その中の二つはわかりましたが、Whoに関しては私の方がいいのでは？」

我ながら恐ろしい事を口にしたものだ。相手は、当然驚いている。「えっ？ あなたが？ い、いや、それは駄目です。この復讐は僕が考えたものですから。あなたには危険な目に合わせられません！」  
そう必死で抵抗する姿は、可愛くも見えてくる。

「しかし、最も優先すべき事は計画を成功させる事ですよ。亜佐美に弟がいる事なんて、敵さんも知っているかもしれないし、ひよつとしたら、写真か何かで面も割れているかもしれない。ましてや、成功したとしても、警察に真っ先に疑われるのは間違いなくあなた方身内ですよ。その点、私ならば問題もそんなに多くはないかと」

さすがに悩んでいるようだ。やがて、そこから出てきたのは

「申し訳ありませんが、やはり納得しかねます。ここは僕自身の手を汚すべきです」

- 5、 わかりました。そこまで言われるのならば
- 6、 いいえ、ここは譲れません

「わかりました。そこまで言われるのならば、もうこれ以上は言いません」

その後、彼の車で場所を私のマンションへと移した。

「綺麗にされていますね？」

「そんな事はないですよ。まあ、ここにでも座ってください」

「早速、話の続きなんですが。あいつの住処はこの辺りのスカイコーポなるマンションです」健二君は、車から持ち出してきた地図を捲り、指で小さな円を描いている。次に、別の頁で同様の作業をし「ここが勤務している会社です」

「ここですか。で、通勤手段は？」

「いや、わかりません。たまに姉を送り届けていましたので、車は持っているかと。しかし、どう考えても、会社よりもマンションの方がやりやすいような」

「他の目もあるでしょうから、確かにそうですね。まあ、その意味では通勤途中も危なっかしいですね」

「残る問題は、このマンションのセキュリティでしょうか？ 所詮若造ですから、たいしたマンションには住んでいないとは思いますがね」

「でも、相当数の女から貢いでもらってるのならば、金回りはいいかも」

この私の言葉に、相手が気色ばむ。

「そ、そうでしたね。それにしてもムカつく野郎だ」

「まあまあ、そんなに熱くなるのは失敗の元になりますよ。では、そのセキュリティについては後からでも確認するとして……」いつものまにか、自分が主導権を持っているのに気づく。

「どのような手段を用いるか？ ですね」

「そこが一番頭を痛めるところです。何しろ、いろんなものが考えられますから」そう言いながら、健二君は指を折り始めて

「まず、毒でしょう。それから、刺すに絞めるに殴るに、まあ、撃つは無理ですから……」

詰まった様子なので、後は受け持って

「他には、突き落とす、焼く、溺れさす、爆破させる、ガス中毒させる、押しつぶす……見方を変えて、自殺に追い込むというのもありますね」

スラスラと喋るのに対してか、はたまた最後のフレーズに対してか、とにかく相手は目を丸くしている。

「いろいろと出てくるもんですね。でも姉としての本望は、やはり苦しませた拳句に自殺に追い込む、でしょうが」

「それは、非現実的に見えます。まして、凶太い神経の持ち主だったらなおさらです」

「それはそうですね。では、何が最も成功率が高いのか？」

「難しいですね。まず、焼くという手段は無理でしょう。あと、毒というのも素人には簡単に入手できかねますよね」

「笠間さん。実は、毒に関しては知人に当てがえない事もないんです。大学院の応用化学を専攻している奴なんですが」

「それでしたら、確かに入手はできそうですが。他人を介在させて大丈夫ですか？」

少し考えた拳句、彼は

「それについては問題ないとは思っています」

「しかし、最初の内は誤魔化せても、新聞沙汰になると気がつくんじゃないでしょうか？ あの時志垣に渡した毒薬だって」

「うーん、口は堅い男なんで、念さえ押しておけば大丈夫かと」

そこまで言われると、それ以上は反論できなくなる。しかし、危ない橋と思うのには何ら変わりはない。

「では、健二君。それ以外の手段は如何です？」

「そうですね。この本人としては、瞬間に勝負がつく“殴る”また

は“刺す”辺りを選択したいところです」

「わかりました。実際に事を運ぶのはあなた自身ですから、お任せします」

「逆に笠間さんにお聞きしますが、あなたなら何を薦めますか？」

「そんな、殺人手段についての推薦なんて聞いた事がない。いや、今後も聞く訳がない。しかし、意見を求められているので、私なりに

7、ここは、やはり手を汚さない毒殺が

8、ここは、やはり鈍器辺りで一撃を

9、ここは、思い切って車ごと燃やしましょう

「いいえ、ここは譲れません。あなた同様、この私も成功を強く望む一人ですから！」

相手は、この勢いに圧倒され

「そ、そこまで言われるのなら、今回はお願いします」

「今回は、って 次回なんてありませんよ」

「は、はい。すみません」と、頭を下げながら

「では、どうやって殺りますか？」

この言葉に少しだけ考えて

「手段よりも、いかにしてあいつに近づくか？ まずは、これですね。但し、時間は掛かるとは思いますが」

そう、いきなり殺せと言われても無理な話だ。

「では、どうやって近づきます？」

これまた、同じ様な台詞が飛んでくる。

「すぐには思いつきません」

彼の目が、こちらの爪先から頭のとっぺんまで舐めるように動いている。

「あなたなら、あなたの魅力なら上手くいくと思います」

10、「そ、そうでしょうか？ やれそうでしょうか？」

11、「えっ？ それは無理というものですよ」

サウンドのないサウンドノベル “殺人を前提としたお付き合い” 第一幕

「ここは、やはり手を汚さない毒殺がベストかと」

考えが一致したと見えて、彼も喜んでいる。

「やっぱり、そうですね。アリバイも作りやすいですし」

「アリバイ？」

今まで、全く気がつかなかった。でも、それに関しては、この二人の接点が表に出ない限り大丈夫のような気もする。

「ええ、アリバイですよ。必要だと思いますが」

「決行日に、あなたにできるだけ似ている男友達を食事にも誘って、身代わりにしましょうか？」

数多くはいないので限定はされるが、一応候補らしき男の顔は浮かんでいる。

「似ていると言っても、知れてるでしょ？」

「だから、何か特徴を 例えば、あなたは明日から肌身離さず赤い帽子を着用するとかして、それを周囲に印象づける。私の方は、当日に男友達を食事に誘って、事前にプレゼントをした同じ赤い帽子を被らせて、店の人間にでもその印象を植えつけておく。これだけでも、後日あなたを見たボーイ辺りは、“確かにこの人でした” って証言しますよ。人間の記憶だなんて、所詮そんなものだと思いますが」

「そ、そんなに上手いききますか？」

「おどおどさえしなれば、問題ないですよ。恐らくあなた自身もそこまですかなくても似たような経験はお持ちでは？」

「は、はあ。では、明日にでも早速赤い帽子を手に入れます」

素直な人物だ。別に帽子でなくても、いや、仮に帽子だとしても、青でも黄色でも何でもいいんだが。

「是非、そうしてください。赤い帽子……これでいいですね？」 相手が頷くのを見て、先を進める。

「しかし、毒の名前や効能は別としても、何に、どうやって毒を仕掛けます？」

彼は考え込んでしまった。やがて

「そうになると、逆に人ごみの方が仕掛けやすいような気がします。

ランチの時間とか……」

「会社の食堂だったら、お手上げですね。じゃあ、外食しているのをお祈りでもしましょうか」

「その辺りに関しては、すぐにでも調べてみます。あとは、プロに相談して適切な毒薬ならびに、その量や効能などを聞いてみます」

「即効性とか遅効性とかありそうですね、確かに。まあ、その辺りはお任せします。では、具体的な決行日が決まりましたら、わかり次第お電話くださいね。こちら身代わりの人間を用意する手間がありますもので」

二日後に、電話があった。決行日は、次週の木曜日のランチタイムである。どうやら、お祈りが通じたようだ。こちらの方の段取りもスタートさせる。それにしても、会社は休むしかない。

木曜の昼前、彼氏を装った男とのデートの最中だ。私は、予定通りに目をつけていた店にランチを誘う。戦争のような、バタバタした食堂では覚えてはもらえないので、今回は少々奮発して落ち着いた店を選んだつもりだ。そんな事など露知らず、お馬鹿な隣の男は、もらったばかりの赤い帽子を喜んで被っている。素直だけが取り柄なので、扱いにも困りはしない。

時刻は、一時を回っている。気が気でないが、電話をする訳にもいかない。仕方なく、安全をみて、連れには二時まで付き合わせる事にした。だが、待ちかねていたものは、ちょうど一時半にやってきた。

「もしもし」

「ああ、笠間さん。遅くなつてすみません」

「そんな事より、どうでした？」

「ええ、何しろ超満員の食堂だったので、隙を見つけるどころか、接近するのにも一苦労で」

「ええ、ええ。で、首尾は？」

「あいつがオーダーしたうどんに即効性の毒を入れました。そして、すぐに店を出しましたが、その際に大騒ぎになりました」

「は、はい。それで？」

「店を出た後に、陰から様子を覗っていたのですが、救急車がすぐにやってきました」

「ちゃんと死んだんでしょうか？」

我ながら怖い発言だ。

「ええ、聞いた量よりもほんの少しだけ増やして使ったので間違いはなかるうかと」

ようやく、これで一安心したので初めて労をねぎらった。

「健二君、お疲れさまでした。これで、亜佐美も浮かばれるというものです。ああ、こっちのアリバイの方も上々の出来だったと思います」

すぐに家に引き返した私は、大好きな番組を待ちわびるかのよう  
に、テレビに釘付けた。

やがて、ローカルなワイドショーにて第一報が流れてきた。

『今日、午後一時過ぎ、K市の繁華街の食堂で飲食中の男性が突然  
倒れ、救急車でD病院に搬送されました。その男性は到着前にすで  
に亡くなっており、K署のその後の調べで、何らかの毒を盛られた  
事が判明しております』

こつやつて死んだのを確認でき、ようやく肩の荷が下りたのを感じ  
る。

『なお、亡くなられた男性は、近くの 商事に勤める刈谷三郎さ  
ん、二十六歳で……』了

7 (後書き)

もちろんフィクションではありますが、第三者の刈谷様のご冥福を  
ともにお祈りしましょう。byイボヤギ

「ここは、やはり鈍器辺りで一撃を」

「やっぱり、そうですね。勝負が早いでもんね。となると、夜にマンションで……」だが、まだ確認すべき点が残っている。そう、マンションのセキュリティだ。彼も思い出したように

「しかし、簡単に忍び込める事ができるか、だな」

「そうですね。そこがハッキリしないと仕切り直しになりますからね」

「笠間さんは、今から空いていますか？ もし良かったら、実際にマンションを訪れたいんですが？」

「そうですね、それが一番ですね。構いませんよ」

「すみません。じゃあ、日が暮れないうちに僕の車で早速」

お目当ての建物には、迷う事なく到着した。それに目をやる限り、まだ運は残っていると感じざるを得ない。健二君も喜んでいる。

「ラッキーですね。どう見たって、そこらにあるマンションですね」

「スカイコーポという割には、高さも知れていますね」

（家賃も六万円近辺か？）

二人でガラス扉の前に立ったが、何て事はない、簡単に歓迎してくれた。

「管理人らしき人物もいませんね？」

「隣が、どうやらここを管理している不動産屋らしいですよ。とすると、恐らく夜もこんなものでしょう」

郵便受けで確認して、エレベーターで五階まで上がってみた。ちょうど降りたところの目先にあいつの五〇三号室があった。

健二君は、そのドアに近づこうとした。

「ちょっと待って！」私は周囲を見渡した。

「防犯カメラらしきものもありませんね」

それを聞いて、彼は改めてドアを調べだして

「ごく普通の鍵にチェーンというところでしょう。これならば、荷物の配達人になりすまして、油断してドアを開けたところに一撃食らわせる事もできそうです」

「大きい荷物を持たれた方がいいと思いますよ」

この発言に首を傾げる彼は

「どついう意味です？」

「小さい荷物ですと。内側からチェーンを掛けたままで受け取れま  
すから。大きければ、必ずチェーンをはずして、ヤツの全身を拝む  
事ができます」

「なるほど。そして、押印している時にでも頭に一撃ですね」

「くれぐれも、相手の顔を見た瞬間、昂って手元が狂わないように。  
一撃で終わらせられずに、二度・三度と追撃するのは困難だと考え  
ておいた方がよろしいかと」

「そうですね」

と、素直にこちらの意見に従ってくる。子供ではないので、何で殴  
るのかまでは聞かないつもりになっている。

車で、再び自分の部屋に戻る際に、アリバイについて提案した。

「決行日に、あなたにできるだけ似ている男友達を食事にも誘っ  
て、身代わりにします」

数多くはいないので限定はされるが、一応候補らしき男の顔は浮  
かんでいる。

「似ていると言っても、知れてるでしょ？」

「だから、何か特徴を 例えば、あなたは明日から肌身離さず赤  
い帽子を着用するとかして、それを周囲に印象づける。私の方は、  
当日に男友達を食事に誘って、事前にプレゼントをした同じ赤い帽  
子を被らせて、店の人間にでもその印象を植えつけておく。これだ  
けでも、後日あなたを見たボーイ辺りは、“確かにこの人でした”

って証言しますよ。人間の記憶だなんて、所詮そんなものだと思いますが」

「そ、そんなに上手くいきますか？」

「おどおどさえしなれば、問題ないですよ。恐らくあなた自身も、そこまでいなくても似たような経験はお持ちでは？」

「は、はあ。では、明日にでも早速赤い帽子を手に入れます」

可笑しいくらい真直ぐな人物だ。別に帽子でなくても、いや、仮に帽子だとしても、青でも黄色でも何でもいいんだが。

「是非、そうしてください。赤い帽子……これでいいですね？」相手が頷くのを見て、先を進める。

車は、私のマンションの前に着いた。別れる前に、一つだけ念押ししておく事がある。

「できるだけ早目に決行日を教えてください。こちらも段取りする手間もありますので」

「一週間ばかり、あいつの行動を追ってみます。おおよその帰宅時間やらがわかるかもしれませんから」

二日後に、電話があつた。決行日は、次週の木曜日の夜十一時以降である。それを聞いて、こちらの方の段取りもスタートさせる。

約束の木曜の午後十一時前、彼氏を装った男とのデートの最中だ。私は、予定通りに目をつけていたお洒落な店に食事を誘う。戦争のような、バタバタした居酒屋では覚えてはもらえないので、今回は少々奮発して落ち着いた店を選んだつもりだ。そんな事など露知らず、お馬鹿な隣の男は、もらったばかりの赤い帽子を喜んで被っている。素直だけが取り柄なので、扱いにも困りはしない。

時刻は、十一時を回っている。気が気でないが、電話をする訳にもいかない。仕方なく、安全をみて、連れには一時まで付き合わせ

る事にした。だが、待ちかねていたものは、翌日になっても来ない。もう、こうなった以上電話をするしかない。

「もしもし」

やはり、何の反応もない。仕方ないので連れに一言、

「悪いけど、今日はこれにて解散！」

男を帰した私は、タクシーを飛ばして、再びスカイコーポまでやってきた。だが、少し手前で降車した。そこに、パトカーが一台いるのだ。

嫌な予感が湧いてきた瞬間、

「か、笠間さん」

背後から声をかけられ、思わず声を出しそうになった。

「ど、どうしたの？」

彼は、私の腕を強くつかんで、少し離れた建物の陰に連れて行った。

「ね、何があつたの？」

突然、跪く彼。その手には、今なお凶器の鉄パイプがしっかりと握り締められている。一応、血がついているようだが。

「申し訳ないです。よく考えたら、夜の十一時にやってくる配達人なんて不審極まりないですね？ おかげで、構えられて反撃を受けました」

「反撃？ 怪我は？」

「そこから聞いてくださるとは、優しいですね。怪我はたいしたものではありません。あいつも、こちらの追撃で絶命しました……唯」

「唯？」

彼は、鉄パイプを地面に置いて、完全に下を向いている。

「反撃を受けた際に、どうやら携帯電話を落としたようで」

即座に、現場に目をやった。そこには、すでに複数台のパトカーが集まってきている。そこで、つい言葉が口をつく。

「これは時間の問題、だなあ」

「す、すみません」

そう謝っている彼は、相変わらず土下座の格好だ。  
私はこっそりと、転がっている凶器を手を取った。

了

8 (後書き)

少々、恐ろしい結末です。やはり、  
積極的に光さん自身を動かして  
みるのが得策かと。byイボヤギ

「ここは、思い切って車ごと燃やしましょう」

「えっ？」彼は目を数回も瞬いて、再度

「今、何と？」

「あいつを乗せて、車ごと燃やしましょう」

「そんな大それた事なんて、無理ですよ！」

珍しくムキになっている。

「そんなに大変な事とは思いませんが。逆に、覚悟の自殺のよう  
に見せかける事も可能かと。私ならば、この手段も有力な候補の  
一つです」

「そ、そうですか」

「でも、実行されるのはあなた自身ですから「こつ」した後、顔を  
近づけて

「何だったら、私が代わりにやりましょうか？」

「い、いえ、それには及びません。僕がやると決めましたので」

「ところで、話は変わりますが。女性に最も人気がある殺し方って  
ご存知ですか？」

「いいえ、知りませんが」

「毒殺なんですよ。やはり、直接手を汚さないからでしょうね」

「だったら、僕も毒を使って……」

こちらが言う事に、どこまでも合わせてくる素直な性格だ。これ  
が仇にならなければいいが。

「では、もう一つ。最も検挙される率が高い殺し方は？」

相手は少し考えて

「ひよつとしたら、それも毒殺ですか？」

「さすがに鋭いですね。その通りです。その理由は、素人が無理し  
て入手するんで、足が付き易いんです」

「よくご存知ですね。しかし、今回は知人を通しますから」

「別に、その方を信用しない訳ではありませんが、その方の一存でつかまるかもしれないと考えると、どこまで行っても安心はできないかと」

「じゃあ、お聞きしますが、その火炙りの刑を実行するには何が必要になります？」

「まずは睡眠薬　これならば、素人の我々でも入手できますから、それから油、火種になる紙辺りのもの、ライター、それと目張り用にテープですね。これは、変な臭いが出たり、また燃えかすが残ったりするようなビニール製よりも、紙製の方がいいでしょうね」

健二君は、指を折って数えながら

「特に入手が難しいものはないようですが、唯、どうやって睡眠薬を飲ませるか」

「そうですね。それと、頻繁に運転しているのか、例えば通勤に車を利用していいのかどうか」

「その辺は、明日にでも調べます」そう言いながら、彼は一人でしきりに頷き

「そりゃあ、自殺に見せかけるにこした事はないな」

もはや、完全に言いなりである。やはり、性急な性格が気にはなる。

アリバイに関しては、それほどの必要性を感じなかったの言及はしなかった。いつ実行されるかわからないものに、それを計画するのは土台無茶な話でもあるからだ。

翌日、早速報告が来た。どうやら、運よく車で通勤しているらしい。必要な物の中に、手袋の追加も教えてあげた。

二日後に、再び電話があった。必要な物を全て手に入れたとの事だった。睡眠薬は“超短時間作用型”を採用するようだが、よくはわからない。遺書なんぞを作って彼に渡そうかとも考えたが、余計な事をして足がつくのも本望ではないので止める事にした。時間が

あるのも困ったものである。

三回目の電話　いや、今回はメールである。これが突然来たのは、翌週の木曜日の夜十一時過ぎだった。

「今、ヤツがファミレスに入った。これから実行する」

どうやって睡眠薬を飲ませるつもりなのか、よくわからないし、想像すらできない。自宅待機のこの身だが、相当不安にかられる。その場で眠ってしまうかもしれない。あるいは、その後の運転中にそうなる事故を起こすかもしれない。まあ、これはこれで良しとすべきだが、その際はどうか自損のみにして欲しい。

「今、店を出た」

この後の報告がなかなか来ない。

二十分ほどしてきたのが、“炎の絵文字”　これだけだった。

“今、燃えている”との意味だろうか？

健二君が姿を現したのは、すでに翌日の一時になった頃だった。

「すみません、遅くなりました。あいつが、車の中でナカナカ寝静まらなくて」

そんな第一声よりも

「そ、それでどうでした？」

「ええ、無事に車は燃えつきました。救急車に入れられるところも見たんですが、丸焦げでした」

笑いながら言われると、身震いする。

「そうですか。これで、ようやく終わりましたか」

その後、テレビの画面を食い入るように彼はずっと見ている。

不思議な関係、だと思う。愛情なんてないし、かと言って友情でもない。強いて言えば、仲間意識だろうか。だが、それ以上に行くとも到底思えなかった。

「こ、これです！」

彼の言葉に、私も画面に目をやる。

『昨晚の十一時半頃、市内にて、通行人から“車が燃えている”

との連絡がK署に入ってきました。場所はファミリーストラン

の××店の駐車場で、車一台が全焼し、その跡から二十代から四

十代と思われる男性の焼死体が見つかりました。なお、現在K署の

方で、身元の確認を急ぐとともに出火原因を調べているとの事です

自ずと溜め息が出てくる。

「本当に終わったんですね」

新聞も要らない便利な時代になったものだ。私は、常日頃プロバイダーのサイトを見て、世情を知り得ている。

いつものように覗いたが、上から三番目の記事に目が留まる。

『捜査の洗い直し……』

すぐに、そこを開いてみる。

『一昨日の深夜、ファミリーストランの××店の駐車場にて

車より焼死体として発見された男性 荒牧省吾さん(26)の死

因飲究明中であるK署より、当初、“睡眠薬を服用した後、車を燃

やして自殺を図ったもの”と発表されたが、その後の調べで、睡眠

薬を飲んだ荒牧さんが、“嘔吐により吐き出したものが気管に詰ま

り窒息したのが直接の死因”と判明し、“その後何者かによって

車を燃やされた”との訂正がされた。なお、現在K署では殺人事件

に切り替え、当事件を再捜査中……』 了

9 (後書き)

偶然の悪戯による幕切れです。やはり、被害者の状況確認を怠った  
健二君の浅はかさ。これが問題でした。b y i ボヤギ

「そ、そうでしょうか？ やれそうでしょうか？」

その後、彼の車で場所を私のマンションへと移した。

「やはり、綺麗にされていますね？」

「そんな事はないですよ。まあ、ここにも座ってください」

「早速、話の続きなんですが。まずは敵を知る事から始めましょう」

そう言つて、健二君は車から持ち出してきた地図を捲り、指で小さな円を描いている。

「住処はこの辺りのスカイコーポなるマンションです」次に、別の頁で同様の作業をし

「ここが勤務している 商事です」

「K署が、やけに近いですね？」

「まあ、怪しまれない限りは大丈夫でしょう」

ここで彼は一冊の可愛い手帳を出してきて

「実は、姉の日記なんです」

「日記？」

「ええ。一応昨夜読みまして、重要と思われる点をまとめておきました」

と言いながら、自分のメモ帳を取り出し出している。

「重要な点とは？」

「ええ。主に荒牧に関するものを拾い集めたんです」メモ帳を繰り出した彼は

「例えば、趣味がバンドで、どうやらギターを弾いているらしい、とか」

「アマチュアバンドのギタリスト……」

「はい、バンド名は確かクルキアだったかな？ まあアマチュアながら、かなり女の子たちに人気があるようです」

そうか、だから醜聞も増える訳だ。彼は先を続け

「それと商事会社では、営業部にいるようですね。日記を見る限り、かなりの社交家に思えます。しょっちゅう、女からの電話もあったみたいで」

振り回される亜佐美の姿が目には浮かんでくる。しかし、

「それ以上は結構です」

「わ、わかりました」

さて、まずはいかに接近するか、だ。彼も同じ事を考えているように、視線を下に向けたままである。

しばらくして

「やはり……」「それでは……」

と、同時に声を発した。これを、息が合ってきたとでも言っていて差し支えないだろうか？

「どうぞ、健二君の方から」

「あ、はい。では、接近する方法なんですが」彼は、唾を飲み込みながら

1 2、「ここはオーソドックスに、マンションの前で話しかけて印象を植えつけるとか？」

1 3、「あいつの車の前に飛び出して、轆かれた振りをして接近を計ってみるとか？」

1 4、「熱狂的なファンを装って、あいつのコンサートに向いて、アピールするとか？」

「えっ？ それは無理というものですよ」  
猛烈に反対した。

「そうでしょうか？」

「当たり前です。無理なものは無理です！」

「いや、笠間さん、あなたなら……」

この時、私はこの計画自体から身を引く決心をした。なおもしつこく言ってくる、こんな愚者とはこれ以上付き合いきれない。

「いったい何ができると言っんですか？ 男の、この私に！」 了

11 (後書き)

この章だけ、光さんが男になっております。どうぞ、お怒りをお静め下さいませ。b y i ボヤギ

「ここはオーソドックスに、マンションの前で話しかけて印象を植えつけるとか？」

同感だ。

「そうですね。男のあなたなら、どのように声をかけられたら心が動きますか？」

健二君は懸命に考えた後、

「例えば、『何とかさん！』と呼ばれて振り返ってみると、『あつ、ごめんなさい、人違いでした』なあって、はにかんで言われた日にゃ、コロッといきますよ」  
と、一人で悦に入っておられる。

「なるほど、人違いを利用するのですか。なかなか良さげな案ですね」

「でしょう？　ここでのポイントは、やっぱり演技力でしょう」  
思わず呟く。

「演技力ねえ」

「何なら、僕が相手役になってもいいですよ。とにかく練習あるのみ、です」

それからは、時間が空き次第、練習に精を出してみた。

ほぼ見れる演技にまで上達するのに、一週間もかかってしまった。敢えて雨の日を選択した。これが、ムード作りに一役買ってくれる。そう信じているからだ。

持ち合わせている中で、一番可愛いワンピースを見に着けた。似合っているかどうかは別の話だ。それから、インパクトを与えるよう赤い傘を手にして、いざ外へと出陣した。

あいつが住むスカイコーポの前で、赤い傘を開いたまま、早三十

分ぐらい経過している。風邪でも引いたら、それこそ馬鹿らしいと言っものだ。

やがて、出直しを検討している時に、ようやくお目当ての人物が姿を現してくれた。亜佐美の写真に写っていた顔は、この脳裏にハッキリと刻まれている。単なる遅刻だろうが、それにしても、かなり急いでいる風に見える。

15、「あら？ 倉田さんじゃありませんか？」

16、一度しかチャンスはないので、延期にしよう。

「あいつの車の前に飛び出して、轢かれた振りをして接近を計ってみるとか？」

「当たり前をやれって言うんですか？」

「驚きのあまり、つい大声になる。」

「まさか！ 車の前に飛び出すだけですよ。例えば、信号待ちをしている前を通ってみるとか」

この場に及んで、彼の限界を垣間見たような気がした。

「そんな機会が訪れるのを、どうやって待てと言うんですか？ ずっと車の後ろを追いかけろ、とでも？」

「えっ？ た、確かに」

だが、考えとしてはまんざら悪くはないので

「では、マンシヨンの駐車場から出てきたところを狙って、車の前で転んでみましょう。まだ徐行中だから、多分大丈夫でしょう」  
多分ね。

「気をつけてくださいね」

自分で提案しておきながら、案外無責任な男だ。だから、男ってやつは……

早速、二日後の朝に、スカイコーポの門前にいる私だ。健二君は駐車場で待機して、連絡をくれる手はずになっている。

「今、やってきました。あっ、車に乗り込みエンジンをかけました。そろそろ、そちらに向かいますよ。いいですか、赤いツーシーターです」

どうやって、正面からツーシーターを判断するのか、是非ともご本人に聞いてみたい。

すぐに赤い車の姿が目に入ってきた。思ったとおり、まだ速度は

かなり遅い。二、三メートルの距離になった時、その前に飛び出し、怪我をしない程度に転んでみせた。こう見えても、家で何回も練習した成果だ。そして、車の方を見て悲鳴を上げる。この後の事は一切覚えていない。

ベッドの上での生活も、早一週間になる。左足首の複雑骨折らしい。

初日こそ、見舞いと言うか、謝りと言うか、とにかくあいつはやってきた。せつかくの接近できるチャンスではあったが、あまりにもムカついたため、けんもほろろに追い返してしまった。今考えるに惜しい事をしたものだ。もちろん、それ以降は姿を見せには来ない。

こうやって退屈な日々を送っていると、闘争心も薄れて、いや、なくなってしまうたと言った方が正しいだろう。それどころか、何やらおかしい心が芽生えてきているのだ。

健二君は、言い出さずの責任を感じてか、毎日欠かさず見舞いに来ては身の回りの世話なんぞを健気にもやってくれている。思った以上のいいヤツだ。

そろそろ、彼も説得してみよう……今はこう思っている。了

13 (後書き)

かなりの無茶をされましたが、このような“見え見えの”結末もたまにはよいかな……かのように思う次第です。どうぞ、健二君と末永くお幸せに！b y i ボヤギ

「熱狂的なファンを装って、あいつのコンサートに出向いて、アピールするとか？」

「なるほど、それもアリですね。でも、アピールできるかどうか」

「所詮アマチュアバンドですから、コンサート会場に早目に行けば、最前列を確保できるでしょう」

「そこで、声を大にして声援を送る訳ですか？ もし、それでもアピール不足だったら？」

「いやな役回りだが、仕方ないかも。」

「その時は、楽屋 といつか、着替えとかしている部屋にでも押し入ってみてはどうかと」

「他人事だから言えるんだよね、そんな事を。だが、そんな表情の優れない私を見て」

「やっぱり、駄目でしょうか？」

「い、いえ、何とかしてみましよう」

「竹を割っただけでなく、その上を易々と歩いてみせる、この自分の性格が少し嫌にも思う。」

「コンサート当日、頑張って最前列確保に成功した私だが、まるでこのまま仮装行列にでも参加できそうな出で立ちだ。妹に借りた服だが、ジッパ―も最後までは上がりきれしていない。残念ながら、声をかけた友人たちには、見事に全員に振られてしまった。」

「とにかく、予想を上回る熱気だ。目の前には、恐らく、あいつと思われる男が白いエレキギターを振り回している。だが、派手なメーキャップのおかげで断定はできない。」

「とにかく、周囲の娘らが若くてウルサイ。恥を忍んで対抗するも、声自体に張りが無いのがちと哀しい。」

案外マシなコンサートだった。一昔前の“何とかミゼル”を髣髴とさせるものだったが、大きくオリジナリティに欠けるのが、素人といえば素人である。だが、全くあいつにアピールができなかったので、言われたとおり楽屋へと向かう。しかし、そこまで行くのに例の乳臭い娘どもがウヨウヨとたむろしており、一步も進めない状態だ。めげずに強引に掻き分けてみると、横から

「こら、痛いやんか！ このババア！」

普段は打たれ強いのだが、今の一言は心の中心を綺麗に貫いてくれた。

「駄目じゃん、いい歳して喧嘩なんかしちゃ。それも、相手は高校生だよ」

その後、訳が分からないうちに、取調室に連れて来られていた。

目の前の刑事は誠に慇懃無礼なる男だが、言っている事は的を射ているので何も言えない。

「それにさ、妹のか何かしらないけど服まで借りたんでしょ？ ジッパーが上がりきれてないよね」

思わず背中に手をやる。いつ見たのだろうか、それにしても観察力が鋭い。

「まあ、相手側から被害届も出てないからさ、今日のところは帰ってもいいよ。じゃあね！ もう来ちゃ駄目だよ」

下手をしたら、あのような刑事と相見えるかもしれない。そう考えると、再度計画を吟味した方がよいかも 警察署の通路を歩きながら、私は思いを巡らした。

玄関から外に出たところで、健二君が待っていてくれた。

「大変でしたね。そ、それにしてもすごいアザになっていますよ」

そうか、鏡なんて見る暇がなかった。

「まあ、相手が五人でしたから。それよりも、もう一度計画を練り直しましょうか？ このK署はかなり手ごわいと思いますし」

「わかりました。では一旦戻りましょう、「10番」まで」  
そう言って、彼は肩を貸してくれた。久しぶりに、身に沁みてく  
る優しさだった。了

14 (後書き)

失敗は成功の元と言います。再チャレンジされてみては如何でしょう？ ちなみに、この刑事は、拙著愚作シリーズである奇跡署のメンバーの一人、山迫刑事です。b y i ボヤギ

「あら？ 倉田さんじゃありませんか？」

別に名前なんて何でもよかったので、高校の時の恩師のを拝借した。その声をかけられたあいつが、驚いてこちらを凝視する。やはり、ステージの上とは別人だ。

「だ、誰？ ……ですか？ 人違いですよ。ちょっと急いでいますんで」

「倉田さんでしょ？」

「まだも食い下がる私に

「違いますって！ ははあ、何かの勧誘の新しいやり方ですね？

まあ、頑張ってください。じゃあ、失礼！」

走って立ち去る時に、こちらにぶつかり、赤い傘が地面に裏向きに落ちてしまった。だが、それを拾う事さえ忘れている私。

引き止めるだけの魅力がなかった？ い、いや、遅刻しそうで慌てていたからだ。しかし、失敗した上に面まで割れてしまうとは…

…一から考え直す必要が出てきたのは事実だった。了

15 (後書き)

もう少々だけ落ち着いた行動をされた方がよろしいかと。しかしながら、結果として罪を犯さなかった訳ですから…… ホツとしました。  
b y i b o y a g i

一度しかチャンスはないので、延期にしよう。面が割れたら、二回目はない。

こう結論を出し、その場を後にした。

洗濯したワンピースも乾いた二日後、再度決行を試みた。今日は晴れている。もう、雨などはどうでもよい。だが、傘がない分、この格好は相当に恥ずかしい。

今回はあまり待つ事もなく、あいつが登場してきた。早速、声をかけてみる。

「あら？ 伊吹さんじゃありませんか？」

別に名前なんて何でもよかったので、中学校の時の恩師のを拝借した。その声をかけられたあいつが、驚いてこちらを凝視する。やはり、ステージの上とは別人だ。

「おたく、どなたですか？ 僕は伊吹なんかではなく、荒牧と申しますか？」

「えっ？ ご、ごめんなさい。あまりにも知り合いに似ていたもので、つい……」

と言いながら、深々と、かつできるだけ可愛らしく頭を下げてみる。恐らく、ヘアコロンのフローラルな香りが、その鼻をくすぐっている事だろう。

「いえいえ、そこまで謝らなくても。誰にでもある事ですから」

耳に届く声が優しすぎる。これは脈があるかもしれない。さて、続いて何を話そうか。

17、「あらっ？ もしかしたら、クルキアタのギタリストの省吾さん？」



「あらっ？　もしかしたら、クルキアタのギタリストの省吾さん？」  
「えっ？」

そう言ったきり、相手から笑顔が消えた。

「この顔を見ただけで、普通はそこまで思わないよね？」

「ご自分でも把握していらっしやる。さらに、

「単なる追っかけでしょ？　困るんだなあ、朝っぱらからさ。近所の手前もあるしね」

「追っかけなんかじゃありません！　本当に偶然なんですから！」

「はいはい、そういう事にでもしときましよう。じゃあ、急いでいるから」

その言葉を残して、あいつはさっさと車の方へと歩いて行ってしまった。

面まで割れたのに何もできなかった私は、この場に呆然とたたずんでいる。

弱ったな。これで二人とも面が割れてしまった。果たして、我々には、他にどんな方法が残されているのだろうか？　了

17 (後書き)

一言余計でした。さて、次はどういたしましょう？ ちなみに“クルキアタ”とは、ラテン語で十字軍の意味でした。byイボヤギ

いや、ここは何も言わずにじっと見つめておこう。相手から喋ってくるのを待った方が得策だ。

「どうされました？」

「い、いえ、本当に申し訳なかったと」

爪先から頭の頂まで舐めるような視線に気がつく。少々の手応えは感じるが、同時に大いなる嫌悪感も湧き出てきている。

「そうですね、そこまで悪いと思われるのなら、罰として一度デートでもしましょうか？」

フン、乗って来たか。さて、ここからはアドリブで頑張ってみるか。

「で、でも、そんな見知らぬ方といきなりデートの約束だなんて、そう言いながらも、背中にブツブツが出てきそうだ。」

「ははは、始めは誰でも見知らぬ方ですよ。なかなか魅力的な笑顔を見せてくるが、所詮底が浅そうな男だ。」

「そ、それはそうなんですが」

「ははあ、彼氏の事を気にしてるんですね？ いいじゃないですか、一度きりのデートなんですから」

「そ、そんな事……彼氏なんていませんから」

情けないが、今日初めて正直な事を言った。それを聞いて、相手が喜ぶ事！

「えっ、そうなんですか？ だったら、問題なしですね。いやあ、実は、僕も彼女がいらないんですよ」

この嘘つき野郎め。亜佐美の顔を思い出してきて、無性に腹が立つてきたが

「そ、そうでしたか。彼女、いないんですか」

「ええ、本当ですよ。あれ？ ところでまだお名前を聞いてなかったですね？ 申し遅れましたが、僕は、荒波の荒に、牧場の牧、反

省の省、それから吾輩の吾と書いて、荒牧省吾といいます。キミは「？」

フン、反省とはよく言ったものだ。さて、どうしたものか？

19、今後、いつ何時ばれるのかわからないので、ここは本名でいこう。

20、やはり、亜佐美との関係がばれる恐れがあるので、偽名を使おう。

今後、いつ何時ばれるのかわからないので、ここは本名でいこう。

「笠間 竹冠の笠に間です。名前は漢字一字で、光です」

「笠間光……何か聞いた事がある名前だなあ」「顎に手を当てながら「ちよつと待つててね」

彼は、そついい残して、再びマンションの中に消えていった。

お、おい、会社は？ いや、そんな事よりも、かなり拙い展開になつてきた。

しばらくして、戻ってきた彼は

「やつと見つかったよ」と言つて、一枚の写真をこちらに見せ

「ねえ、この亜佐美の隣にいるのつて、どう見てもキミだよね？」

それを見るまでもなく、間違いなく本人だ。私も、同じものを机の上に飾っている。

A、「そ、そうかなあ？」

B、「い、いえ違いますよ」

どちらの選択肢を持つてしても、時すでに遅しである。

「まあ、どつちでもいいんだけどさ」相手の表情が豹変し

「何しに、のこのこと僕に会いに来た訳？ あいつつてさ、病気で勝手に逝つちやつただんだらう？ ねえ、一体何しに来たのさ？」

亜佐美は、あんたのせいで自殺したんだよ こう叫ぶ前に、短気な私は、目の前にある股間を思いつき蹴り上げていた。

その場で悶絶する馬鹿者を放つたままで、自分のマンションへと戻つた。その途中で、亜佐美に心から謝る私だった。

ごめんね。復讐するなんて大見得を張つたのに、股間を蹴り上げる事しかできなくて……了

サウンドのないサウンドノベル “殺人を前提としたお付き合い” 第一幕

19 (後書き)

いつも正直なのがベストとは限りませんが、殺人まで犯しておられないので、これもいいかと。ちなみに、馬鹿者は全治一ヶ月だと耳に入ってきました。byイボヤギ

やはり、亜佐美との関係がばれる恐れがあるので、偽名を使おう。だが、おろかな私は、何も考えていなかったのだ。

「き、岸見……アン、です」

何の事はない。忘れる事のないように、苗字は、“かさま”のそれぞれを一字だけ後ろにずらしただけだ。名前の方はそれもできないので、“光”の逆の“暗”を、それらしくカタカナにただけである。

「へえ、アンって言うんだ。いい名前だよ。ねえ、ひよつとしてハーフ？」

全くもって、気づかなかった。が、ものはついでだ。

「ええ、父がフランス人で、母は日本人です。でも、一度もフランスを訪れた事はありませんが」

一応、ボロが出ないようにこう言いかけたが、白々しくも、急に巻き舌にはなった。

「そっか。いいよねえ、ハーフってさ。ところでさ、アンちゃんって、今度の日曜は空いてる？」

本音を言うと、こんな初対面からタメグチをきくヤツが大嫌いだ。しかし、携帯電話のスケジュールを見る振りをして

「えっと……空いていますが」

「本当？ だったららさ、あそこ行こうよ、デイスティニーランド！ もう、嫌というぐらい行ってるんだがなあ。

「え、ええ。わかりました」

その後、遅刻なんて何のその、電話番号やらメールアドレスやらをしつこく聞かれて、ようやく解放された。

これで第一段階はクリアした。早速、健二君にも報告しておこう。それにしても、住所まで聞かれなくて助かった。こればかりは、さすがに世の中に存在しない所は言えないからだ。

早、一ヶ月が過ぎてしまった。幸か不幸か、今のところ順調な交際が続いている。どうやら、あいつも当方の魅力に徐々に惹かれていく模様だ。会う感覚が短くなってきているのが、その証拠と言えるよう。これはこれで、何だか自信がついたようで嬉しいものである。

さあ、健二君と打ち合わせをしなくては。そろそろ、第二幕を上げようではないか。

お疲れさまでした。ここまで来られました138名の皆様方。貴殿には素質が(何の?)備わっておられるようにお見かけいたします。また、ストリートに來られた方。恐ろしくて、今、思わず身震いしてしまいました。なお、そのうちに第二幕も開くこととは思いますが、お気づきのよう展開が苦しくなってきました故、ここら辺りではし休息を取らせていただく所存です。では、またお会いしましょう。本日は誠に有難うございました。では……08/09/27\*250名様が読破されました。拙著に貴重なる御時間を頂戴しまして、心より御礼申し上げます。実は、個人的には最も気に入っておりますもので、是非とも第二幕も書きたいのですが……パワーがありません、今のところ。09/06/05

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1591f/>

サウンドのないサウンドノベル “殺人を前提としたお付き合い” 第一幕

2009年6月6日12時00分発行